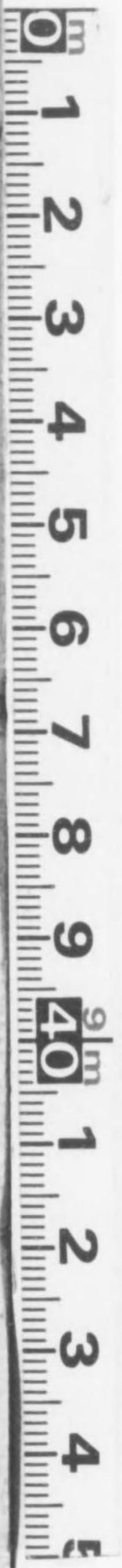


特 259
121

菅原時保禪師

碧巖錄講演 (其十七)



始 ←

特259
121



臨濟宗
建長寺派
管長
菅原時保禪師

碧巖錄講演

(其十七)



碧巖錄提講

第三十九則 雲門花藥欄

◎垂示

垂示云、途中受用底、似虎靠山、世諦流布底、如猿在檻、
欲知佛性義、當觀時節因緣、欲煨百鍊精金、須是作家爐鞴、
且道、大用現前底、將什麼試驗、

讀方

垂示に云く、途中受用底は虎の山に靠るに似たり、世諦流布
底は猿の檻に在るが如し。佛性の義を知らんと欲せば當に時

節因縁を觀ずべし、百鍊の精金を煨へんと欲せば須く是れ作家の爐鞴なるべし。且く道へ、大用現前底は什麼を將つてか試験せん。

提講。「途中受用底」途中は差別、受用は平等。——差別を外にして平等なし、平等を離れて差別なし。差別即平等、平等即差別。——又は静と動。静を外にして動なし、動を離れて静なし。静即動、動即静。——又は體と用。體を外にして用なし、用を離れて體なし。體即用、用即體。——是大悟徹底し自己を忘じたる境界。——自己を忘ずれば一切自己ならざるなし。故に差別に處して即平等、平等に處して即差別。其

の自在、其の自由、可謂、眞空妙有、妙有眞空、と。——臨濟禪師の、途中にあつて家舍を離れず、と云ふそれである。此の途中にあつて家舍を離れずと云ふことを、秋野師は極めて平意に左の如く云うて居らるゝ。諸君が會社に通うてをつても家の事を忘れず又家に居つても會社に通うてゐる事を忘れぬやうなものだ、』と。——是を鬧市裡に天子を見る、とも又は不起那伽定現諸威儀、とも云ふ。——此の働きこそ虎が山に寄り嶋を負うたも同様、其の猛きが上に更に猛きを添ふが如し。

——苟も修行を始めたなら此の處まで到らざれば寧ろ始めより修行せざるがまし。元來修行は爲人度生が目的。恁麼の自由

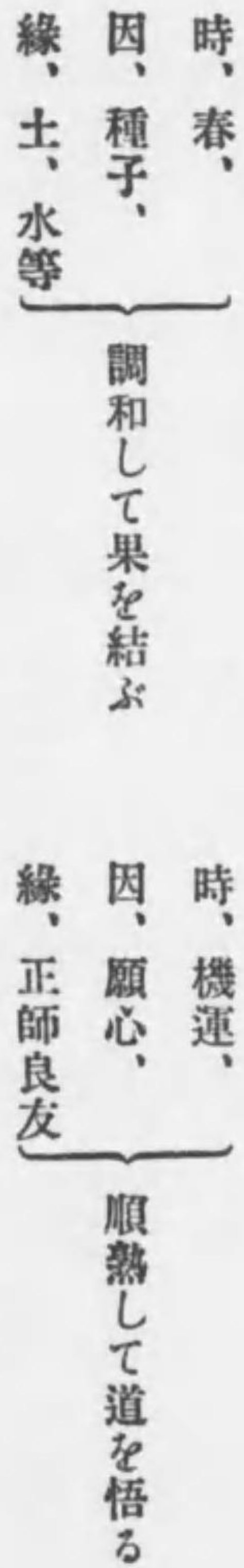
自在が手に入らざれば自救既に不了。焉ぞ人を導くことを得んや。

「世諦、流布底」世諦は俗諦。俗諦は眞諦に對しての語。流布は自己を忘ぜずして事に當るを云ふ。自己を忘ぜざるがために、一切時、一切事に對して煩惱が流れ、妄想が起る。爲に融和を缺き、自由を失す。反目又は狐疑、心身共に憂鬱。萬事意の如くならず。恰も猿の檻にあるに似たり。如何に輕跳を以て自任する猿でも檻中にあつては眞箇の妙用を現すことは出来ぬ。猿のことにつき記憶を呼び起した。猿の繪で有名な狙仙と云ふ人が猿の繪を描いた。誠によく

出來た。眞に生きた猿のやうに見える。そこで其の當時、和蘭の畫家にこれを見せた處が、「之は誠によく出來て居るが、此の猿は人に飼はれて居る猿で、天然の山猿ではない。」と。狙仙は是まで飼ひ猿ばかりを寫生して、本當に山に居る猿を寫したことがない。狙仙は此の人の一言に感奮して、其の後深山に入り、猿の群に入り、深く研究を積み遂に猿の妙諦を極めた、とある。見る人も能く見る人、聞く人も能く聞く人。——猿氣分の妙諦は檻中にあつては顯れぬ。——檻中の猿に似たる人は到る處に多し。何が故に束縛を解脱し陋習を打破せざるや。陋習を打破せざれば面目は新たならず。束縛を

解脱せざれば手足は自由ならず。自由を欲し解脱を望む人は、須く見性すべし。見性とは佛性を徹見することなり。佛性を徹見することは自己を忘ずること。——自己を忘れて事に當れば、歩々清風、隨處に主、——豈快ならずや。——
 「欲知佛性義、當觀時節因緣。」此の句は涅槃經ねはんぎょうにありと云ふ。本具の佛性を徹見すること敢へて困難のことに非ず。』されど其の妙用を顯すには修行を積まざるべからず。——「時節因緣」此の時節は春夏秋冬の如く一定不變の時節に非ず。人々修行の力如何により其の時節一ならず。甲の人の悟りたる時節は甲の人の時節。——乙の人の悟りたる時節は乙の人の時節。

甲の人の時節を以て乙の人の時節としたり、乙の人の時節を以て甲の人の時節となすことは出来ぬ。』所謂、欄干雖共倚、山色看不同。——此の法は人々分上ゆたかに具はると雖も、修せざれば顯れず証せざれば得られず、と承陽大師しやうやうだいしも云うて居る。先決問題は修行であります。——試みに時節因緣を圖にして示せば左の如し。



一言以て是を覆へば、因緣熟する處、遲速あり。桃栗三年、柿

八年。彼の瓠栗を見よ。時期が来れば自然に弾けて中から美味い實が飛出す。敢へて坐禪に限らず。すべての成功の的を射落すには急がず、騒がず、根機をつゞけるが第一義である。——修行に頓の頓、頓の漸あれば、悟處にも漸の漸、漸の頓なき能はず。(一々例あり今は略す。)何れにせよ刻苦光明。——刻苦せざれば因縁は熟せず、因縁熟せざれば光明は發揮せず。——如何に刻苦するか。曰く、「欲煨百鍊精金、須是作家爐鞴。」一口に云へば學者の修行底。——作家とは、解行相應、越格の力量を具する正師家を指す。爐鞴とは、正師家の活手段、惡辣の方便。その中へ學者の精金(菩提心)を入れて難透難解の鉗

鎚で、打つて打つて打ちぬき、鍊つて鍊つて鍊りぬく。——雪竇禪師の、君が爲に幾度か蒼龍の窟に下ると云はれた、それである。——

言を寄す、禪を學ばんと欲する人に。苟も禪を學ばんと欲する人は辛苦を嫌ふ勿れ。艱難を避くる勿れ。進んで辛苦を求め、喜んで艱難に接せよ。而して正師家は點滴も施さざる秋霜烈日の如き惡毒頑嚴の人に限る。——老婆の親切は寧ろ學者を殺す。——慈悲の臭口は三世の仇。——常に恒に衝天の威氣を持し、俊鳥林に栖まず、活龍水に滯らざるべし。——
「且道、大用現前底、將什麼試驗。」大用現前とは前に云ふ途

中受用底の働き。——その働をなす人の拔群越格の腕前は如何に。進んで本則に參すべし。

◎本則

舉、僧問雲門、如何是清淨法身、門云、花藥欄、僧云、便恁麼去時如何、門云、金毛獅子、

讀方

舉す。僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ清淨法身。」門云く、「花藥欄。」僧云く、「便ち恁麼にして去る時如何。」門云く、「金毛の獅子。」

雲門禪師の事は前に屢々お話を致しました。今は略します。

今更事新しく申すまでもなく、佛教學上に於て佛身を三種に分けます。曰く法身。曰く報身。曰く應身。』以上の三身の中で、釋迦佛の如きは應身佛。阿彌陀如來の如きは報身佛。』宗派に依り種々の説がある。法身を釋迦の方では久遠成實の釋迦と云ひ、彌陀の方では法性法身の彌陀と云ふ。——委細は教家に參問すべし。』——法身の總名は摩訶毘盧舍那如來、漢譯して徧一切處とも大日とも云ふ。——抑、法身佛の姿は一面から云へば無相、一面から云へば有相。時間的には無始無終、空間的には無量無邊。而して能く大、能く廣、能く長。有相即無相。

——時あり有相を現じ、時あり無相を示す。是が法身そのもの

の。(強ひて斯く云ふ。)法身由來清淨。清淨とは、空、無礙、無作の義あり。云ひ換へれば天真爛漫、現成そのまゝ。——眞箇の清淨法身は畢竟何の處にある。人々具足、箇々圓成。——

大悟して知るべし。言端語端の顯し得る處にあらず。——

僧、問雲門、「如何是清淨法身。」此の僧、清淨法身の所有者でありながら、自己の清淨法身を知らずして他に向つて清淨法身を問ふとは、念の入つた愚者に非ざれば拔群の劣者である。昭和今日、念入りの愚者、拔群の劣者極めて多し。衲が如きは其の一人である。——されど「問僧は雲門の宗旨を吞込んでをりながら雲門を驗せんとする機鋒が手漉い。殊更に法身の上」

清淨の二字を冠させたは此の僧の鐵腕だ。」と或人は云ふ。果して然るや。從來法身は不生不滅、不垢不淨不滅。——門云、

「花藥欄。」之是を雲門禪師の那一曲と云ふ。佛祖も未だ曾て唱へ出さざる陽春白雪。——雲門禪師は曾て睦州禪師に門を閉

され、爲に脚を打つた瞬間に法身の妙處を手に入れた。其の境界から「花藥欄。」と問僧に答へられた。之是の花藥欄、折脚當時、ア、痛ツと云はれた、それと同一不二。「天に倚る長劔、中に風露の香ばしきあり。」——蓋し知る人ぞ知る。講釋も説明も出來ぬ。——花あり月あり樓臺あり。——花藥欄とは句欄で取圍んである花園、又は菊のまがき、又は雪隱の袖垣とも云ふ。」

雲門禪師の意旨を體得すべし。文字や言葉に執着してはならぬ。「言を承けては須く宗を會すべし。」——玄沙禪師は法身の問に對して膿滴滴地と答へ、或人は法身の問に應じて法身無相と云はれた。——諸君、法身は清淨か不清淨か。——壞か不壞か。——大内君云く、「只々、如何なるか是れ清淨法身、花藥欄、如何なるか是れ清淨法身、花藥欄、と打成一片に拈じ去り拈じ來つて時節因縁を觀ずる外はない。」と。或は然らん。——畢竟花藥欄は何れの處にある。自己返照。——僧云、「便、恁麼去時如何。」「仰せの通り左様に心得た時は如何でござる。」此の僧、舊參底と見える。此の進言に力がある。」と大内君

は云うてをる。衲は云ふ、「恁麼去時如何と云ふ、それだけ擬議して居る。」——門云、「金毛獅子。」秋野師は、「問僧に對して雲門禪師が金毛の獅子と賞讚された。」と。——果して問僧は金毛の獅子か。——「之是の金毛の獅子はこの僧を肯ふ肯はざるに關したことでない。唯是金毛の獅子、と——清淨法身を再び投げ出して見せた。」と飯田禪師は云ふ。——如何にも飯田師は獅子翻身の術を得て居る。——問僧の如きは蓋し獅子皮を被たる野干である。——敢へて本則の問僧に限らず、現今一般の禪僧何れも獅子皮を被て野干鳴をなすお仲間である。衲は其の尤なるもの。——金毛の獅子につき、「唐の則天武后

のため賢首大師が華嚴哲學を講演されし時に、宮中の飾物にしてある金毛の獅子を喩に用ひて、十玄緣起の眞理を解説された。故に金毛獅子の詳細を知らんと欲せば賢首大師の華嚴金獅子章を見るべし。」と井上君は云うて居らるゝ。閑を得て華嚴金獅子章を拜讀致したきものである。——金毛の獅子、金で造つた獅子。外面から見ると、頭は頭、尾は尾、手は手、足は足、毛は毛、總て一様ならず。然れども内面から見れば、總てが金そのもので出来て居る。——それと同じく千差萬別の點から見れば、宇宙は一様ならず。一元素の點から見れば、宇宙は一元素。花藥欄即金毛の獅子。金毛の獅子即花藥欄。それらの總てが

即、清淨法身、——清淨法身が即萬象森羅。——萬法即一、一即萬法。

◎頌

花藥欄、莫顛預、星在秤兮不在盤、便恁麼太無端、金毛獅子大家看、

讀方

花藥欄、顛預すること莫れ。星は秤にあり盤に在らず。便ち恁麼太だ端なし。金毛の獅子、大家看よ。」

「顛預」とは、馬鹿にする、又は、分りもせずに分つた様な顔をする。——雪竇禪師、花藥欄と雲門禪師の云はれたそのま

を拈出して、清淨法身を問うたのに花藥欄とは如何にも人を小馬鹿にした答だ、と雲門禪師を抑下して、いや決して雲門禪師は人を小馬鹿にしてはをらぬ、是が眞箇の清淨法身。——

諸君、自分と自分で、自分を顛、預する勿れ。

「星在秤、不在盤。」權衡の目は其の竿にある。皿の方には無い。雲門禪師の眞言は大機大用の上にある。花藥欄と云ふ言葉の上にはない。然るに眞意の大機大用を閑却して閑言語にのみ着目するは、馬鹿猿が水中の月を取らんとするが如し。本當の月は中天に皎々然として居る。——其の影を取つて其の形を忘る、本意を失して言葉を取る、そこを指して、——「便恁麼」

それならさうと譯もなく承知した様子を使恁麼と云うたものだ。故に圓悟禪師は著語して、崑崙に箇の棗を呑む、と嘲笑された。お互も崑崙に箇の棗を呑むことが多い。——「太無端、」雪竇の眼から見れば、何の謂れもなき言分だ、——お座なりだ、——その場にごしだ、と云はるゝが、さう云はるゝ雪竇禪師こそ太だ端なしではないか、と圓悟禪師は揶揄して自領出去と下語された。——結句の「金毛の獅子」是は雪竇禪師の清淨法身、——雲門禪師の口眞似ではない、諸君も金毛の獅子。——山も川も、草も木も、瓦礫土塊も金毛の獅子。——「大家看、」都ての人を指した言葉。各自お互に自己返照して見

よ。眞の獅子か將亦狗子か。——昔年、覓火和煙得、今日、擔泉帶、月歸。——一舉手、一投足、金毛の獅子ならざるなし。——東西南北無門戶、大地山川不覆藏。——前三々後三々、——金毛の獅子ならざるなし。——されど、求妙心於瘡紙、付正法於口談、を如何せん。——

(昭和十三年三月二十六日講演)

第四十則

陸亘天地同根

◎垂示

垂示云、休去歇去、鐵樹開花、有麼有麼、黠兒落節、直饒七縱八橫、不免穿他鼻孔、且道、請訛在什麼處、試舉看、

讀方

垂示に云く、休し去り歇し去れば鐵樹も花を開く。有りや、有りや。黠兒も落節す。直饒、七縱八橫なるも、他に鼻孔を穿たる、ことを免れざらん。且く道へ、請訛什麼の處にか在らん。試みに舉す看よ。」

提講。石霜禪師に七去と云ふ公案があるが、「休去歇去」とは其の中の二つを拈出したものだ。——清風拂明月、明月拂清風」と云ふが如くに、煩惱と云ふ煩惱、妄想と云ふ妄想を徹底的に拂ひ盡したる處。例せば「輪劍直衝龍虎陣、馬喪人亡血滿田。」と云ふが如くに、敵と云ふ敵、賊と云ふ賊を徹底的に征伏したる底。——飯田師は此の處を、身心脫落、因地一下の時節、と。——井上君は學者であるから學者の立場から、是は禪宗の術語、相對的知識より生ずる一切の思量分別を拋棄すること、所謂、不思量非思量の境、と。何れも大死一番底を指して居らるゝ。無論然りであります。」大死一番せざれば大活は現

前しません。大死一番せざれば眞箇自己を忘ずることは出来ません。眞箇自己を忘れざれば大活の自由は得られん。故に圓悟禪師云く、休し去り歇し去りて茲に始めて鐵樹花を開く、と。

——「鐵樹開花」と云ふことは大活現前の換へ言葉。古人の句に鐵樹花開劫外春と云ふがある。鐵の樹に花が開くとは如何にも不思議、と思ふであらうが、決して不思議でない。眞箇自己を忘ずれば一切自己ならざるなし。一切が自己であれば、大を以て小となすことも、小を以て大となすことも、又は佛殿を以て山門に入ること、燈籠を以て露柱に入ること、自由自在。況や鐵樹に花を咲かすに於てをや。何の不思議か是あら

ん。所謂平生底の茶飯。

大死一番せずして是非を語るはなほ盲者が日月を見ずして日月を品評するが如し。不思議と思ふは當然。苟も日月を品評せんと欲せば先づ以て開眼すべし。鐵樹に花の開くを知らんと欲せば先づ以て大死一番し來るべし。——「有麼有麼」圓悟禪師が會下の大衆に向つて、現在こゝに休し去り歇し去る底の禪者ありや。大死一番せし人何れの處にかある。本則の南泉禪師の如きが蓋し其の人ならん。——「黠兒落節」如何に狡猾の人でも大死一番して居らぬとイザと云ふ場に臨んで落節するぞ。(落節は商人が物を賣りそこねて損をすること。) 暗に陸亘

大夫を指す。イヤ黠兒でなく、眞箇大死一番、再活現前、七縦八横、法に於て自由自在の働きをなす人でも、(是も陸亘大夫を云ふ。)眞箇大徹底したる大作家の面前へ出ると、「不免穿他鼻孔。」井上君は此の句につき注意して云く、鼻孔を穿つとは、鼻をあかす、機先を制して他を茫然たらしむること、と。(不免の二字は鼻をあかされることに解すがよい。) 字面通りに云へば、牛が繩にほだされ、七八才の牧童に思ふ様に引き廻さるゝこと。——例せば、白隱禪師が鼻孔遼天の勢で飯山の正受老人の處へ行き、思ふがまゝに引き廻された。白隱禪師平生の力量も半文錢の値なし。始終機先を正受老人に制せられた。——「且道

誦訛在什麼處。」誦訛は、もつれ、入りくむこと、——又は不正確、不謹慎、その落節の處、その鼻をあかさされた處。本則の南泉禪師と陸亘大夫の間答商量、その中にある。眞箇大死一番した人であれば一目分明、——一聞千悟。——サア參じ去れ。往いて聽くべし。

◎本則

舉、陸亘大夫、與南泉語話次、陸云、肇法師道、天地與我同根、萬物與我一體、也甚奇怪、南泉、指庭前花召大夫云、時人見此一枝花如夢相似、

讀方

舉す。陸亘大夫、南泉と語話する次、陸云く、「肇法師は道へり、天地と我とは同根にして萬物と我とは一體なりと。也甚だ奇怪なり。」南泉、庭前の花を指して、大夫を召して云く、「時の人この一株の花を見ること夢の如くに相似たり。」

提講。陸亘大夫は姑蘇城外の寒山寺で有名な姑蘇即ち今の蘇州の人。御史大夫の官について居られた故、陸亘大夫と云ふ。南泉普願につき修行なされた人。——肇法師は譯經者として有名な羅什の弟子。序に羅什のことを簡短に申し添へておきます。(井上君の説を拜借。)羅什は具さには鳩摩羅什と申します。龜茲國の人。西曆四〇一年に長安に來り、仁王般若經、金剛般

若經を譯出し、引續き示寂の年まで澤山の經論を譯出なされたとのこと。』譯經につき、後秦の二世姚興の特別なる保護がありました。助手三千人、更に姚興から妾として妓女十人を與ふ。故に羅什と妓女の間には混血兒も出來たとあります。何れにせよ非常な佛教學者でありしことは疑ふ餘地なし。弟子中に特に卓越して居る人が十人、是を羅什門下の十哲と稱し、その十哲の中から更に優秀を四人撰拔し、是を四哲と云ふ。(道生、僧肇、道融、僧叡。)肇法師は即ち四哲の中の一人、僧肇のことでもあります。前に申し上げておきました如く、或事情で死刑の宣告を受け、特に死刑の執行を七日間猶豫を願ひ、其の七日間に寶藏

論を著述された。それを一口に肇論と云うて居ります。本則にあります「天地與我同根、萬物與我一體、」は肇論の中から引用したのであります。肇法師此の時三十才位と思はれます。

或日、南泉と語話する時、陸亘云く、「肇法師の、天地と我と同根、萬物と我と一體、と云はれた、それは甚だ以て奇怪である。」と。此の奇怪に二様の見方がある。一は肇法師を咎めた見方、

——一は肇法師を讚歎した見方。——法師を咎めた方は同

根一體に達せざる見方。——法師を讚歎した方は同根一體に徹したる見方。——茲では肇法師を咎めた見方。陸亘大夫未だ禪そのものに充分通達して居らず、儒學の眼光より恁麼いんげんの句

を照し見れば如何にも奇怪千萬である。天地萬物森々羅々一として同じきものなし。然るに我と同根同體とあるから不審の起るは尤。蘇東坡の如きも未だ禪理を知らざる以前は或は陸亘大夫と同一の見識なりしならん。それが禪理に透徹して云く、「其の變ずるより見れば天地も一瞬する能はず。其の變ぜざるより見れば物と我と長く存す。」と。——云ひ換へれば宇宙に種々様々の差別ある一切の總ては、其の根本、其の本體から見れば同一平等である、と云ふことになる。圓悟禪師、甚だ奇怪なり、と云ふ處へ下語して、（南泉禪師、陸亘大夫の眼光の小狹なるを見て、彼をして言外に深意のあることを知らしめん爲の老

婆）——指庭前花、（看よ天地と同根、萬物と一體。——）更に召大夫曰、「時人見此一株花如夢相似。」と。「之是の一句は夢か現か、虚か實か、唯見る瞬間に眞箇脱落底の境界を得せしめんが爲の南泉爲人の涙である。」と飯田師は云ふ。——井上君は南泉禪師の胸中を忖度して、「世の中の人斯の如き美なる花を見て、宇宙の美を鑑賞するでもなく、神の大能を讚美するでもなく、ボカンとして居るが、この宇宙の事物に對してよく熟慮冥想し來れば、どうしても吾人は肇法師の結論に達するに相違ないと思ふ。」と云うて居らるゝ。——竿頭更に一步を進めて云へば、一株の花を夢で見て居るのみならず、同根と云ふ

も一體と云ふも夢を見て居るのである。夢の夢ならざることを知らんと欲せば夢中の祖師西來意に參ずべし。——參じて寤寐合一の處に到達して始めて、同根を語るべし、一體を論ずべし。然らざれば總て是れ痴人の夢物語。斯の如く衲が唇皮を弄して居るのも畢竟するに痴人の夢物語。「事到極處則難說、理到極處則難明。」——說かんと欲して説く能はず、明らかめんと欲して明らかめがたし。圓悟禪師云く、「鴛鴦繡出して君の看るに従す。金針を把つて人に度與せず。」——金針を把つて度與は致しません。各自金針を把つて鴛鴦を繡出すべし。

◎頌

聞見覺知非一二、山河不在鏡中觀、霜天月落夜將半、誰共澄潭照影寒、

讀方

聞見覺知一々に非ず。山河は鏡中の觀に在らず。霜天月落ちて夜將に半ならず。誰と共にせん澄潭照影の寒きを。」
提講。「聞見覺知非一二。」之是の一句は極めて大切。故に古來異説すくなからず。——要は心境一如、物我不二、差別なりに一體となり、一體なりに差別となる。是が修行の根本義。」云ひ換へれば平等とは差別になりきつて自己を忘れた時、——

差別とは平等になりきつて自己を忘じた時。——波の外に水なく、水即波。水の外に波なく、波即水。水ときは水でよし、波の時は波でよし。知るべし、差別の外に平等なく、平等の外に差別なし、差別即平等、平等即差別なることを。聞見覺知につき初學者のために略圖を左に示します。



眼に色を見、耳に聲を聞き、意に種々のことを思ふ。其の一例。見るときは色と云ふ境縁があつて眼根の因に映する、それを意識が分別をする。此の外、鼻舌等同様であります。

詳細のことを知らんと欲する人は佛教學者に參じて知るべし。敢へて佛教と云はず、強ひて禪學と云はず、天地自然の道理として事々物々一として固定性のあることなし。總てが縁に従ひ感に赴き周あまからざるなし。之是が眞空妙有、妙有眞空。更に其の意を取りて云へば、因縁生滅即眞如。——聞く、眞如、無體依、因縁、因縁無體依、眞如と。此の頌の一々に非すと云ふを大内君は左の如く説いて居らる。『天地萬物みな是の如く

にして一々に非ず。盡く千差萬別である。要する所は萬物は萬物、自己は自己。現成公案そのまゝに何の不足があつて、同根だの一體だのと餘計な心配をして疵のない天地萬物を疵物にするのであるぞ。」と。此の理なきにしもあらず。されど一回は同根一體と云ふ處に徹底して、而して「高い山から谷底見れば、瓜や茄子びの花ざかり。」と云ふ差別に出るでなければ、所謂、衆生顛倒、迷己逐物、と云ふ迷者そのものになる。學者注意せざるべからず。——聞見覺知、畢竟何ものぞ。一か二か。一に非ず二に非ず。聞見覺知は聞見覺知、——それでよい。——
 「山河不在鏡中觀。」是れに二種の見方あり。一は山河は鏡中

に在つて觀ず。一は山河は鏡中の觀に在らず。『山河は鏡中の觀にあらず、と云ふは井上君の卓見。其の意に云く、「佛教哲學では唯心の所造と云うて居るが、鏡中に映つて居る山河が其の映影の中に實在するのでなくて、山河そのものは映影以外にチヤンと實在して居る如く、吾人の心鏡に映ずるすべての事物も實は吾人の見聞覺知以外にチヤンと實在して居る。鏡中の形相は山河そのものでなく、吾人の認識は事物そのものではない。このやうな神秘幽遠な消息は仲々凡俗の味ひ得る所ではない。』と。——大内君は、「敢へて自己の鏡中に推し込めて見るに及ばず。眼に色を見る當體其のまゝ、十方法界沙門の一雙眼。そ

の他に、性だの心だの同根だの一體だのと彼れ是れ云ふに及ばぬ。」と云うて居らるゝ。——秋野師は、「山河は向ふにある其のまゝでよい。鏡はこちらにある其のまゝでよい。山河も鏡も其のまゝが佛性の現れである。其の例に、机は机、水さしは水さし、そのまゝそれが利益を與へて居る。」と云はるゝ。——飯田師云く、「山河と鏡中、山河は客、鏡中は主。主は客によつて滅し、客は主によつて亡ぶ。主客心境相忘するとき宇宙一枚の蓮華藏世界である。」と。——何れも参考の好資料。——多少の淺深あり。學者、水乳を共に喫する勿れ。——衲は恁麼の句に對して沈黙を守り、欽んで一句を呈す。芭蕉無耳聞雷

開、葵花無眼隨日轉。」——「霜天月落夜將半、誰共澄潭照影寒。」是は讀んで字の如し。強ひて説明すれば玉に疵。——人々親しく恁麼の實境に接して恁麼の妙味を知るべし。——大内君は霜天云々の二句に對して、「モウ夜が更けて草木も眠る丑滿時、誰あつて月を眺める者もなければ水に臨むものもない、鏡の如く澄みわたりたる水の上に、かの山の端に傾いた殘月の影が物すごく映る、これは何の爲で如何なる道理であらうぞ。月に映る權利があるでもない。善いでもなければ悪いでもない。都べての理窟は離れて、月影はどこまでも月影、澄潭はどこまでも澄潭。」と至つて御親切のお言葉。されど是は畫

餅。——事實霜天云々に直面したる人の言に非ずと云ふべし。

——故實全師は、恁麼の二句に向つて、「絶對無功用の妙境は言語に絶して心行の及ぶ處でない。」と。云ひ得て好し。——

飯田師云く、「知るものは知る。知らぬものは知らぬ。」と。如何にも然り。知る人には語る必用なし。知らざる人には語るは無駄。——圓悟禪師下語して、「若不同床睡、焉知被底穿。」——

「愁人莫向愁人說、說向愁人愁殺人。」衲は七十三才の今日、事實恁麼の眞境に接せず。故に説明すべき權利なし。朗吟して、恁麼なるやを想像するのみ。——諸君、事實を徹見せざる虚言を聞くより寧ろお互が事實を如實に徹見し、而して後に霜天

云々の句に參ずべし。其のとき眞偽、深淺、是非、醜美、自知せらるゝことあるべし。陰陽不到處、一片好風光。——

(昭和十三年四月九日講演)

第四十一則 趙州大死底

◎垂示

垂示云、是非交結處、聖亦不能知、逆順縱橫時、佛亦不能辨、爲絕世超倫之士、顯逸群大士之能、向氷凌上行、劍刃上走、直下如麒麟頭角、似火裏蓮華、宛見超方、始知同道、誰是好手者、試舉看、

讀方

垂示に云く、是非交結の處は聖も亦知ること能はず。逆順縱橫の時は佛も亦辨すること能はず。超世絶倫の士と爲つて

逸群大士の能を顯す、氷凌上に行き劍刃上を走るに向ては、直下に麒麟の頭角の如く、火裏の蓮華に似たり。宛ら超方たるを見て、始めて同道なることを知らん。誰か是れ好手者なるぞ。試みに舉す看よ。」

提講。「是非交結」は、是とも決せられず、非とも決せられず、是に似て或は非、非の如くに、或は是。それが交結、入り交つてをるから頗る解決に苦しむ。そのものそれは由來無自性、無定性、鐘の打つに應じて響き、水の汲むに随つて現するが如し。——先の出様で鬼にも蛇にも變化自在。——要は主客相見、賓主問答の一刹那に、鐵を轉じて金となし、凡を轉じて

聖となすのである。

此の是非交結につき秋野師の婆言を左に添へておきます。「是非と云ふは乃ち死活のことである。死と活とは元來別物ではない。死中に活あり、活中に死あり。死んで生きて居る人もあり。生きて死んで居る人もあらう。すると死活は誠に交結して居る。

——煩惱の外に菩提なく、菩提の外に煩惱はない。恰も水と氷の様なもので、寒氣に會へば氷となり、暖氣に會へば水となる。迷へば衆生となり、悟れば佛となる。所謂、生佛不二。」と。以上初學者のためには此の上もなき好き参考になります。

「聖亦不能知、」如何なる聖人と雖も、是中に非あり、非中に

是あり、非中更に非あり、是中更に是あり、と云ふ交結愈々交結、それを到底分明に判断することは出来ぬ。況や聖人にあらざる凡夫に於てをや。如何ともなす能はず。されど眞箇の破衲子であれば一見辨見するぞ。——「逆順縦横」是は正師家が學者に對する活手段。逆かと思へば順、縦かと思へば横。殺中に活あり、活中に殺あり。放行必ずしも放行に非ず、把住必ずしも把住に非ず。時に依り處に依り、把住の如くにして、其の實放行、放行の如くにして、其の實把住。笑ふあり、泣くあり。其の圓轉、其の轉換、其の自由、其の自在、佛祖と雖も辨明するを許さず。——故に正師家に對する學者は鉤頭の意を識取して

定盤の星を認むること勿れ。

大内君、茲に一言して云く、「西方彌陀の本願と東方薬師の本願と、同じ佛陀ながら全然其の立場が違ふ。同じ春風に發展するに於ても、花は紅に、柳は緑である。花の三昧は柳の知つたことではない。月の悟りは風の會せぬ處であるやうなものぞ。」と。——花の三昧は柳の知つたことでない、と云ふ此の一句、蓋し千金の値あり。——是非交結の處を徹見し逆順縦横の處を辨得する、その人こそ絶世超倫の士である。絶世は世に勝れたること。超倫は比類なきこと。英雄とか豪傑とか又は大丈夫と云ふほどのこと。茲では佛來も亦打し祖來も亦打すと云ふ破

納子のことである。苟も禪界の大法王となり人天の大導師を打出なさるそのお手元が拜見したい。——見せませう。目を張つて見なさい。耳を傾けて聞きなさい。

「向、氷、凌、上、行、劍、双、上、走」向と云ふ字を劍双上走と云ふ劍字の上にも加へて見ると能くわかります。或人は向と云ふ字を如と云ふ意味に用ひてをらる。納は向と云ふ字を全然とり去つて、單に氷凌上行、劍双上走、として提講致します。或人は、「氷がいくら堅くとも、刀がいくら鈍刀でも、随分危険なものである。然るに其の危険を何とも思はず走行する、それが絶世逸群の人たる所以である。」と云うて居らる。或は然らん。

大内君は、行き得べからざる所に自由に行き、走り得ざる所を自在に走る、と見てござる。」是亦或は然らん。――

氷凌上、劍刃上、此の上に行き、此の上を走る、元より喪身失命は覺悟でなければならぬ。故に眞劍ならざるべからず。要は、苟も絶世とか逸群とか云はるゝ正師家は、自己平生底は無論のこと、學者接得の場合は眞劍更に眞劍、一點も我を入れず、聊かも心を止めず、そのものそれになりきる。――そのなりきる三昧が無ければ、氷凌上、劍刃上は云ふまでもなく、疊の上も歩けるものではない。眞箇三昧の妙境を得んと欲せば百鍊千鍛、少くとも三十年せざるべからず。――眞箇三昧の妙境

に到達したる其の人こそ、そのまゝ、麒麟の頭角、――火裏の蓮華。麒麟の頭角は出格の義、――火裏の蓮華は不思議。井上君は、麒麟の頭角は比倫なき才能の發揮、――火裏の蓮華は神秘の活動、と云うてをらるゝ。味ふべきである。――お互が麒麟の頭角、火裏の蓮華になるべし。ならざるべからず。――

天に二日なし乾坤只一人、――頭角か。蓮華か。――
自己なきとき宇宙と同化、――頭角だ。蓮華だ。――
「宛見超方、始知同道。」是は本則の趙州と投子を暗に指したものである。超方は、云ふまでもなく、絶世逸群。その人の超佛

越祖ぶり、それを見、それを知り、茲に始めて知音同士の商量
が出来る。兩虎の戦ひ乎、——二龍の玉争ひ乎。——衝突
の如くにして衝突に非ず、平和に似て平和に非ず。云く、衝突
以上の衝突、平和以上の平和。——「誰是好手。」速に本則に
入り實地に好手底を拜見すべし。否、好手底を我ものにするべし。

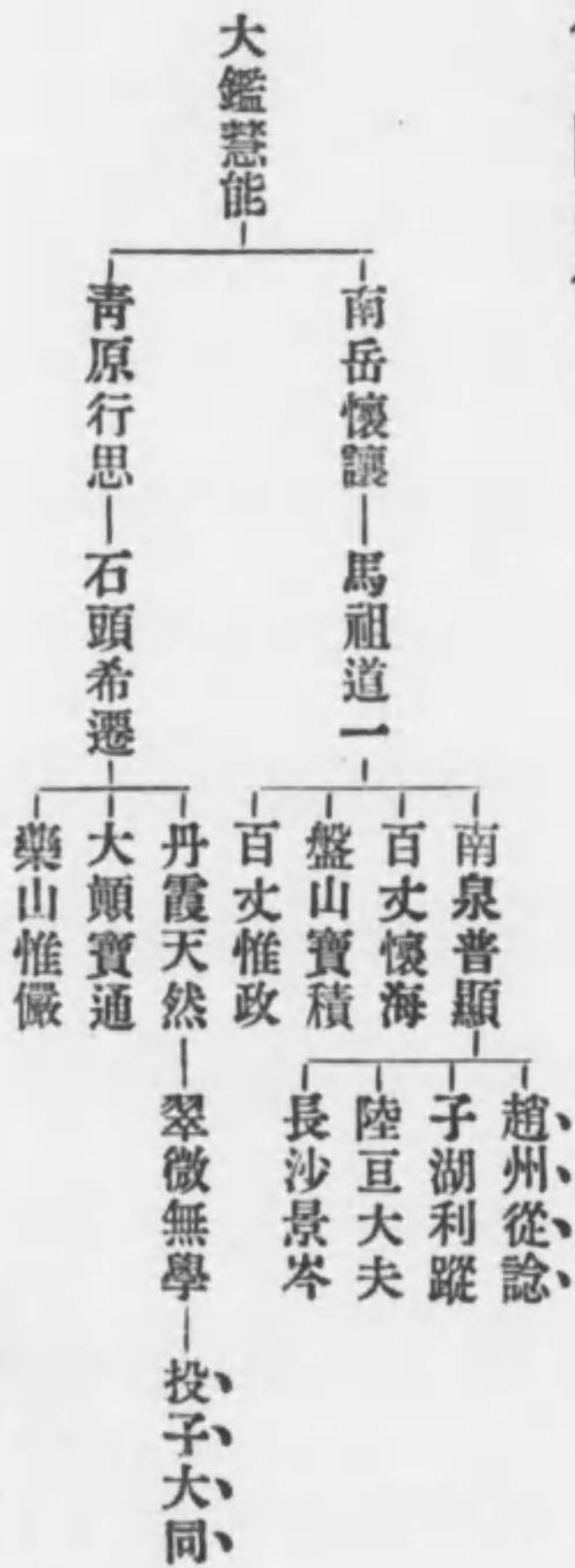
◎本則

舉、趙州問投子、大死底人却活時如何、投子云、不許夜行
投明須到、

讀方

舉す。趙州、投子に問ふ、「大死底の人、却て活する時如何。」

投子云く、「夜行を許さず、明に投じて須く到るべし。」
提講。觀音院の從、禪師のことは第九則の處で略説して置き
ました。——投子は投子山に三十餘年間、隱遁生活をなされ
た大同禪師のこと。左に趙州と投子の法脈を略示しませう。井
上君の圖に依る。



達磨大士十一世の孫に當ります。本則は大將と大將の一騎打、一好手と好手の相見、一賊と賊の商量、一面白いぞ。面白いぞ。——大死底云々は、云ふまでもなく、肉體の死ではない。見聞覺知を離れ、一切の思慮分別を去つた大悟底、大涅槃のこゝと。随つて活と云ふことも肉體の活ではない。大死一番した處から大活現前底。——趙州も投子も共に大死底の人、又共に大活底の人。死活を超越して居る二人の問答であるから無論死活を離れてをる。衲なまの如きは死活なき其の中に居住して今方に死活を夢みて居ります。死活を夢みて居る衲が死活を超越したる人の問答を提講するのであるから、實際の處、夢に夢みるこ

ゝろで五里霧中、方向がつかまません。——されど多少の經驗があります。それをたよりに一應申し上げて見ませう。

大死は即大活、大死せざれば大活なし。大死大活、其の名異にして其の實同じ。大死のまゝが大活、大活のまゝが大死。大死は大死で、壁立千仞、大活は大活のまゝで、壁立千仞。言を換へて云へば今日の日用光中を除いて、大死も、大活もあるなし。——

趙州禪師、投子禪師、共に恁麼の道理を體得すると同時に恁麼を日用光中に仕用してござる。それを問うたり答へたりするのは、お互が早朝、人に逢うて、お早う様、お早う様と云ふ、それと同一であります。寧ろお互が毎日々々其時々々必用に應じ

て、語りつゝ、ある其の方が或は此の本則以上の活公案であるかも知れぬ。

趙州禪師は、投子禪師の心中を知りつゝ、お互に友人と友人との茶飲み話しをする如く、ザツクバラリに、「オイ君、夜寝て眼が覺めたらどうする。」それを堅い言葉で云ふから、「大死底人却活時如何。」となるのである。「ウー眼が覺めたら寝てをらずに起きて働け。」それを固い言葉で「不許夜行投明須到。」と云うたのである。故に圓悟禪師は大死底人却活時如何、と云ふ趙州の處へ、賊は貪兒の家を打せず、と言を下された。眼の見える泥棒は金のある家でなければ這入らぬ。投子なら共に語る

に足ると思ふから一問試みたのである。果して投子は趙州の意思を知り、夜行を許さず云々と答へた。茲の處へ圓悟禪師、一句を下して、「是れ賊、賊を知る。」と評された。圓悟禪師は流石に眼光が銳利である。お互も銳利の眼光を以て趙州及び投子並に圓悟の心中を照破すべきである。然るに多くの盲目者、表面の堅き言句に驚愕して裏面の意旨そのものを洞觀し得ざるは、如何にもお氣の毒のことである。由來正法に不思議なし。禪は正法、元より不思議なし。頭々、顯露、物々、全眞。——當處を離れず常に湛然たり。之是の不思議なき正法を喫茶喫飯、坐作進退の間に、無造作、無工用に仕用する人こそ、絶世逸群の大

士であり正師家である。——然るを大死が平等だの向上だの、大活が差別だの向下だの、——不許とは趙州が死と活との二つに渡つてをるからだの、と閑妄想をなす人は此の公案を拜讀する權利なし。寧ろ閑妄想を起さず、飲んで香を焼き碧巖録に向つて三拜九拜する、それが迷雲を拂ひ邪念を消する坐禪であり修養である。

◎頌

活中有眼還同死、藥忌何須鑒作家、古佛尙言曾未到、不知誰解撒塵沙、

讀方

活中に眼有らば還死に同じ。藥忌何ぞ作家を鑒することを須ひんや。古佛尙言へり曾て未だ到らずと。知らず誰か塵沙を撒することを解する。』

「活中有眼還同死、」趙州禪師にかけて云へば、所謂、牡丹花下睡猫兒。』決死の勇士が戰場に倒れて死んだまねをして敵將の間隙を窺ふ様子。ナニクワヌ顔をして投子に問ふ。——投子にかけて云へば、死中有眼還同活、』所謂、鐵牛擎出黃金角、』既に死せしと思ひし其の人が、いつの間にか再活して意外の働をなす有様。不用意に答へた、それが割符を合するが如くにベツタリ、と。——此の句は趙州にかけず投子にかけた方が藥

忌云々の次の句に響が効きます。故に衲は第一句を投子にかけて提講致します。」投子禪師の如きは死活の病氣は元より病後の静養も充分なし盡された人。もはやドクトル先生に用なし。無論食物に於ても彼れ是れと忌み嫌ひはいらぬ。何なりとも隨意氣儘。——然るに趙州が投子の手を握つて脈を見るとは。故に雪竇禪師曰く、「藥忌すら既に用ひず。それを知つてか。若し知つてするとあれば勞して功なし。若し知らずしてするとならば盲目も亦甚だし。投子は健康體であるぞ。何須鑒作家。よせくおよしなさい。」——

圓悟禪師は、趙州の背をうつて一鑒を與ふ又何ぞ妨げん、と云うてをる。無論健康診断と云ふこともあるにはある。されど投子如き人には無用。——轉句に「古佛尙言曾未到。」前句を承けて、「さうは云うたもの、麒麟の頭角、火裏の蓮華に似たる絶世逸群の境界には、恐らくは三世諸佛と雖も未だ到らざる處である。さすれば投子その人の如きには多少なりとも藥忌、

鑒見の用なしとは云ひがたし。」と云ふ見方もある。——されど「趙州禪師の是非交結、逆順縦横の活手段を以て人に接せらるゝ其の境界には古佛と雖も或は未だ到らざるならん、と趙州を托上したのである。」と云ふ見方も敢へて不可なし。——眞箇の境界は未だ曾て何人も知るなし。若し知つたとあらば不

是々々。——千聖も不傳、山僧も亦不知、と圓悟禪師が自白してをる。結句に「不知誰解撒塵沙。」趙州禪師は趙州禪師だけの塵沙を撒し、投子は投子だけの塵沙を撒す。古人は古人。即今何人が能く塵沙を撒することを解すや。——趙州は、大死底人却活時如何、と投子に向つて撒した。投子は、不許夜行、投明須到、と趙州に向つて撒した。——雪竇禪師、敢へて我なりとは云はず、敢へて云はざれども語脈に依つて見れば何人にもハハアと肯心することが出来る。さて諸君、趙州も人なり、投子も人なり、雪竇も人なり、お互も亦人なり。彼既に是をなし得てわれ是をなし得ざる道理なし。然らば諸君お互は如

何に塵沙を撒すべきか。——

更に婆言一口を添へませう。

撒塵沙とは、學者の眼中に投入し、迷の眼は無論、悟の眼も共に眞箇の目くらにする手段。云ひ換へれば衆生を救濟する慈悲の方便。——斯く云はば、「人を目くらにして何の用にかなす。」と云ふならん。云く、「一回目くらにせざれば眞箇の人間となる能はず。」——人を目くらにして眞箇の人となさんと欲せば、先づ以て自己自身が目くらになつて、而して後に人をして眞箇の人たらしめざるべからず。サア眞箇の人となる、又眞箇の人にする、その目くらになる修行は之是の本則に參じて始め

て得べし。――

(昭和十三年四月二十三日講演)

第四十二則

龐居士好雪片々

◎垂示

垂示云、單提獨弄、帶水拖泥、敲唱俱行、銀山鐵壁、擬議則髑髏前見鬼、尋思則黑山下打坐、明々杲日麗天、颯々清風匝地、且道、古人還有誦訛處麼、試舉看、

讀方

垂示に云く、單提獨弄し、帶水拖泥して、敲唱俱に行ふも、銀山鐵壁。擬議すれば則ち髑髏前に鬼を見、尋思すれば則ち黑山下に打坐せん。明々たる杲日は天に麗き、颯々たる清風

は地を匝る。且く道へ、古人還誦詛の處有りや。試みに擧す
看よ。』

提講。

「單提獨弄」聊かも方便手段を雜へず、むきだし、露堂々、そのまゝにて學者を接得する様子。云ひ換へれば、武士が鎗一本ひつさげ、敵陣目がけて眞ツしぐらに飛びこむ姿。——井上君は、自己の信ずる主義によつて獨立獨行、即ち周圍の事情を顧慮せずしてすべてを斷行すること、』と云うて居らるゝ。平意にして能くわかります。——昨今は敢へて禪僧に限らず、總ての人が自己自身に確乎たる信念と實證なきがために、一から

十まで、十から百まで、一々人の口うらを聞き、人の顔色を見て、先様の氣に入る様に、先様の意志に反せざる様に、なまつゝあるは如何にも氣慨なきことである。自己自身に確乎たる信念と實證があれば、所謂千萬人の居る處と雖も大手を振つて我往かん。——斯く云ふ衲も確乎たる信念と實證なきが爲に、單提獨弄が思ふ様に出來ぬ。殘念とは思ふが、實力なきを如何せん。——前車の覆るを見て後車のいましめ。青年學者、覆轍を踏まぬやうに。——「帶水拖泥」文字の如く、水を帶び泥を拖く、前の單提獨弄を第一義とすれば帶水拖泥は第二義。——前を唯自の境界とすれば、是は唯他の境界。——第一義なけ

れば第二義なし。唯自がなければ唯他はなし。唯他と唯自。第一義と第二義。兩々相對し、兩々交換して、茲に始めて眞理の花が開き、修行の果が結ぶ。——我が禪家は常に恒に學者を接待するに第一義の單提獨弄を用ふ。如何にも不親切、如何にも不人情の如くであるが、是が寧ろ親切であり人情である。人情も人情も至極の人情、親切も親切も最大の親切。——其のゆる如何となれば、無始劫來つもりくし煩惱、——妄想袋を即座に打破し、元の佛性そのものになさんと欲せば、生やさしきことでは到底埒はあかぬ。所謂非常手段、——此の非常手段に違つて始めて學者が大悟徹底する。其の點から云へば單提獨

弄即帶水拖泥、唯自が即唯他、父の嚴格が即母の慈愛。——慈愛のみの慈愛は眞の慈愛に非ず。嚴格より出づる慈愛を眞の慈愛と云ふ。——以上は暗に本則の居士をさす。——次の「敲唱俱行、銀山鐵壁。」見やうに二つある。一は師家が平等に坐在せず單提獨弄のまゝ、帶水拖泥の差別に跳出す。一は師家が問へば學者が答ふ、學者が敲けば師家が唱ふ。——今は、單提獨弄、そのまゝ、帶水拖泥、平等即差別と云ふ龐居士の立場より婆言を弄します。

龐居士の單提獨弄、帶水拖泥の端的は、銀山鐵壁、鐵壁銀山。
佛眼も見る能はず魔外も窺ふに門なし。喩へば那須野が

原の殺生石の如く近傍するものは悉く死す。——護生須く殺すべし。殺し盡して始めて安居。——此の殺し殺して殺し盡すことこそ正師家の大慈悲である。正師家にして恁麼の大慈悲なきものは法に於て不親切なるのみならず、お手元の薄弱なることを暗に示してをる。さすがは龐居士、法の爲には点滴も施さず、擬議則鬪、前見鬼。』ぐづぐづすると機を失ふぞ。驀直に進前すべし。寶の山に登つて手を空しうして歸るな。されど賊を認めて子となすこと勿れ。疑心暗鬼、幽靈は自己の外になし。

「尋思則黑山下打坐。」ウロ／＼すると踏みすべるぞ。決斷す

べし。斷行すべし。斷すべきに當つて斷ぜざれば却つて禍を招く。とは云ふものゝ亂りに盲目的に斷行すべからず。脚下照顧。——一步あやまると鬼窟に落ちる。以上の二句は本則の禪客そのものを云ふ。

見るべし、「明々杲日麗天、」——知るべし、「颯々清風匝地。」——昔も今も、亦以後も、打坐一番身心脱落し來れ。明々たる杲日天にあらず、颯々たる清風は地にあらず。「あら樂し思ひは晴るゝ身は捨つる、浮世の空にかゝる雲なし。」心境一如、物我不二。——その不二も忘じ、その一如も認めず。——時に依り日となり杲々として天に麗き、時に依り風となり颯々と

い、地を匝る。豈、輕快ならずや。——「且、道、古人、還有、誦訛處、
麼。」龐居士の如きが蓋し其の人ならん。——誦訛は種々様々
に説明してある。今は簡短に公案と見て妨げなし。「試、舉、看。」
驀直に去つて參ぜよ。擬議尋思して居ると邪魔が這入るぞ。善
は急げ即刻々々。

◎本則

舉、龐居士辭藥山、山命十人禪客、相送至門首、居士指空
中雪云、好雪片々、不落別處、時有全禪客云、落在什麼處、
士打一掌、全云、居士也不得草々、士云、汝恁麼稱禪客、
闍老子未放汝在、全云、居士作麼生、士又一掌云、眼見如

盲、口說如啞、雪竇別云、初問處、但握雪團便打、

讀方

舉す。龐居士、藥山を辭す。山、十人の禪客に命じて、相送
つて門首に到らしむ。居士、空中の雪を指して云く、「好雪片
々たり別處におちず。」時に全禪客有り、云く、「什麼の處に落
在するや。」士、打つこと一掌す。全云く、「居士、也草々なる
ことを得ず。」士云く、「汝恁麼に禪客と稱す、闍老子未だ汝を
放たざること存らん。」全云く、「居士作麼生。」士又打つこと
一掌して云く、「眼は見れども盲の如く、口は説けども啞の如
し。」雪竇、別して曰く、「初問の處に、但雪團を握つて便ち打

つべかりしものを。」

提講。龐居士は衡州衡陽縣の人で、姓は龐、名は蘊、字は道玄、儒者であります。初め石頭禪師に參じ更に馬祖禪師に參ず。馬祖より「一口に西江水を吸ひ盡し來れ。」と云はれて、言下に所知を忘じ大悟徹底なされた。投機の偈に、十方同聚會、『禪林は門戶開放、洋の東西を問はず、人類の如何を論ぜず、道に志す者は悉く來れ。泰山は土壤を譲らず、河海は細流を擇ばず。サア來れサア來れ。此の門に入らざる人は眞箇の正眼は得られぬ。箇々學無爲、』無爲は無我と同意、有爲は悟道の障り。八萬四千の煩惱は有爲有作、——八萬四千の法門は無爲無作。——

有爲有作そのものそれを捨てず拂はず、そのまゝ、即無爲無作の無我大我となすのである。』此是選佛場、』こゝは佛の位に登るか登らざるかの試験場。こゝとは何處か。馬祖に、一口に西江水を吸ひ盡し來れ、と云はれた、それである。僅かに擬議せば落第。——鯉が三級の波を登つて龍となるか落第して元の鯉でをるか、——千番と一番の争ひ、尋常一樣ならざる處。故に轉、不轉の處に向つて轉じ、動、不動の處に於て動ずる力量がなければならぬ。』心空及第歸、』心空は心身脱落、——因、地一聲、——自己を忘じた一刹那、——心境雙亡の端的。——是が禪の特色、——是が禪の禪たる所以。是が無けれ

ば直指人心と云ふも空論、見性成佛と語るも虚説。——昨今は空論虚説の禪が隨處に流行して居る。心ある人、誰か慨嘆せざらん。嗚呼末世々々々々。末世なるかな。されど法は人に依りて弘まる。英雄は時機をつくる。お互に法の爲に奮勵一番せざるべからず。』恁麼の偈を心讀して龐居士と同參、同得、同證、同行の人とならざるべからず。

聞く、龐居士は天津の富豪家。一日家財を天津橋上より放棄し、妻と一男一女を携へて山下に茅屋を結び、娘をして笊を作らしめ、それを賣つて衣食、一日なさねば一日食はず主義を實行された。人あり、「何故に寶を捨てたか。」と問へば、「金は毒

なり。人に與ふれば其の人罪を作る。金を正しく用ふる人なし。毒と知りつゝ、人に與へんよりは寧ろ捨つるに如かず。」と答へられた。「金持と灰吹きは溜る程きたなし。」と云ふ人には大なる諷刺である。——

序に居士が石頭禪師に參じ省所を吟じられた詩がある。添へておきます。

日用事無別、唯吾自偶諧、頭々非取捨、處々沒張乖、朱紫誰爲號、青山絕點埃、神通並妙用、運水及搬柴、最後の二句、特に禪味津津たり。頭々顯露、物々全眞底を知らんと欲せば右の詩に參ずべし。

居士は薬山惟儼禪師の座下に暫く参じて居られた。本則は居士が薬山を辭して歸らるゝ時の法戦一場である。

「居士辭薬山。」居士の胸中、蓋し清風明月の如くであつたであらう。されど劍刃上に人を求め電光中に手を垂るゝことを忘れてはをらぬ。

「山命十人禪客相送至門首。」所謂、門送の禮。薬山禪師何と思うたか非常の優待。——眼東南を見て意西北にあるかも知れぬ。油断大敵、十分の注意を要す。或人は云ふ、「薬山の眼中、道あるのみ。」と。或は然らん。——衲は、「薬山禪師は牡丹花下の睡猫兒を氣取つたな。」と云うておく。——圓悟禪

師下語して、「是れ端倪を識る底の衲僧にして始めて得べし。」と。圓悟禪師も薬山の優待には多少の注意を拂うて居らるゝ。

「居士指空中雪云、好雪片々不落別處。」之は是れ單提獨弄即帶水拖泥。——此の日は雪の降る眞最中。(雪につき雪山釋迦の成道、二祖雪中の直立、雪峰山店の成道、種々ありますが、他日に譲り今は一切略します。)居士、降雪を指し、送者の禪客に向つて云く、「好雪片々、別處に落ちず。」と一矢を放つた。薬山禪師は此の事あるを豫め知り、未だ曾てなさざる優待をなされたのである。居士の腕力、禪客の見識、一時に見、一時に知ることが出来る。『雪は何人も見る通り、天から降つて地に落ち

る。然るに別處に落ちず、とは是れ如何に。——擬議する勿れ。尋思するを休めよ。居士が空中を指した其の指、別處に落ちずと云ふ、そこが目のつけ處。サア雪はどこへ落ちます。

——松の枝に落つれば蜜々、竹の葉に落つれば疎々。——
眼見は心見のよきに如かず、耳聞も亦心聞のよきに如かず。

——雪、千山を覆ふ孤峰、何によつて不白なる。雪漫々、雪漫々。——看よ看よ三尺の雪、人をして毛骨寒からしむ。——

盡大千世界只是れ雪あるのみ。嗚呼雪、雪、雪なるかな。——
「時有全禪客云、落在什麼處。」果然、居士の釣針にかつた。
小魚でもかゝればかゝらぬよりましだが、願ふ所は大魚、——

大魚も大魚も鯤とか鯨とかが欲しい。——全禪客の小魚たる

所以は、什麼の處に落在す、と云ふ、それそれが小魚たる確證。

——大魚ならば何と云ふ。鯤鯨ならばどうする。——それ

は云はぬ。諸君が大魚になつて知るべし。鯤鯨になればわかる。

——「士打一掌。」可謂、銀山鐵壁、と。居士やりをつたな。

——好雪々々、此の片々たる落處が知れなければ好雪ではない。全禪客には惡雪だ。——「全云、居士也、不得草々。」居士の敲唱俱に行ずる底の大慈大悲がわからぬから、聊か怒氣を含んで云く、「苟も紳士たるものが左様な荒つばいことをなさるとは。」と泣聲を出した。——居士の一掌こそ、佛說五千餘卷の

經文や祖示一千七百の公案より有難い一掌である。此の一掌で好雪片々の落處を知るべし。眞箇に落處を知らば、千處萬處一時に透り、千機萬機一時に明かになる。——居士が念入りの芳志を全禪客受取り得ず。故に居士、更に第二義門に下り婆言して云く、「汝、恁麼稱禪客、閻老未放汝在。」そのさまで禪客などと云うて他の信施を受けてをると、閻魔の廳で舌を抜かるゝぞ。

愧はぢを知れ。——自省せよ。——全禪客、愧はぢを知る處か、自省する處か、ますくせきこみ、「居士作麼生。」あなたは、片々たる雪はどこに落ちると思つて御座る。愚も茲に到れば笑ふべきに非ず、寧ろ氣の毒である。——到底斯の如き自省なき

無慚愧の漢は衲なまが如き短氣の者には濟渡は出來ぬ。さすが龐居士だ。是非此の人をして好雪の落處を知らしめたき帶水拖泥の慈悲心から、「士、又打一掌。」手の平で横づらをビシヤリ。——定めし痛かつたらう。——茲で落處を悟るべきだが依然として省なし。居士が鬼の目に涙を流して與へられた一掌、それが亦無駄骨折となつた。——そこを見て圓悟禪師曰く、「雪上に霜を加ふ。再三すれば汚る。大切の矢を二本捨てたな。残念のほど思ひやるぞ。」——されどなほ居士は老婆して曰く、「眼見如盲、口說如啞。」此の好雪片々が見えぬか。——此の落處が言へぬか。——徹底的全禪客をして慚愧後悔、——是れ

に依つて奮起一番せしめんが爲の仁涙義血である。居士の親切は可仰、——全禪客の不覺は可愍。——要するに今日お互がなじつゝある一舉手一投足、一居一動が總て好雪片々である。その妙處を知らんと欲せば打坐々々、打坐し以て心頭の染汚を消滅すべし。百鍊千鍛せざれば鑛金も名刀とならず。凡夫が佛となるは打坐に及ぶ鍊鍛法あるなし。

「雪竇別云、初問處但握雪團便打。」別云、是は他に對して自己の所見を述ぶる時に用ふる古例。代語と意味はちがふ。初問の處とは居士が空中の雪を指さし好雪片々と云うた處。その時、間に髪を入れず雪を一握り居士にたゞきつけたら好かつたに、

と。是が雪竇禪師の好雪片々の落處か。——されど龐居士も居らねば雪もなし。——下すの智慧は後から出ると云ふが、如何にも。雪竇禪師の如きは越格拔群の大宗匠であるから、衲等如きと比較にはなりません。それにしても火事のあとの火の要心と云ふ轍はまぬかれぬ。——圓悟禪師も、「是は是なり。賊過ぎて後に弓を張る。」と下語し、更に語を添へて、「然りと雖も要は箭鋒相拄ふを見る。」と云うて居らるゝ。箭鋒相拄とは龐居士と同唱同和と云ふことならん。取るべきは取るべし。捨つべきは捨つべし。學者、他の言脈裡に轉換さるゝ勿れ。——

◎頌

雪團打、雪團打、龐老機關沒可把、天上人間不自知、眼裏
耳裏絶瀟灑、瀟灑絶、碧眼胡僧難辨別、』

讀方

雪團にて打てよ、雪團にて打てよ。龐老の機關は沒可把。天
上人間も自知せず。眼裏耳裏、絶だ瀟灑。瀟灑絶だし。碧眼
の胡僧も辨別しがたからん。』

機關は無論ハタラキのこと。沒可把は、のこらず把捉する、
と云ふ意味なり、と井上君は云うてをらるゝ。如何にもと共鳴
致します。』絶瀟灑、瀟灑絶、此の絶は上にあつても下にあつて
も意味は同一である。

提講。「雪團打、々々々。」知るべし。雪團打の一句は雪竇禪師、
自己の別語をそのまゝ仕用なされた。是は雪竇禪師の專有にし
て他人の端倪を許さざる處。されど杜宇の一聲とちがつて聞く
度に耳に新しく響きません。多少またか、と云ふ感がおこりま
す。とは云ふものゝ、衲が如き者の及ぶ所に非ず。——承句
の「龐老機關沒可把。」全禪客に一掌を與へた居士も、雪竇禪師
に小供が雪合戦やる様に雪を握つて打つけられたら、禪機だの
法力だのと云ふ文句の出し様はあるまい。』茲の處へ圓悟禪師
が、只おそらくは恁麼ならざることを。』局に當る者は迷ふで、
實際其の場に臨んでは容易に出来るものでない。——「天上人

間、不自知。」好雪片々、——宇宙一片の雪、——乾坤一箇の白。——雪々々、白々々。白の外に雪なし、雪の外に白なし。白皚々、雪漫漫。——圓悟禪師の著語に、是れ什麼の消息ぞ。多少なりとも消息があつたら、不是。——天上人間は元より知らず、三世の諸佛も歴代の祖師も知らず知らず。強ひて云はゞ、「眼裏耳裏絶瀟灑。」雪より外に何もものもなし、白より外に何もものがある。「絶瀟灑。」あゝきれい、——あゝさつぱり。——「瀟灑絶。」——極樂か天堂か。——菩提か涅槃か。——涅槃を涅槃と思うたら眞の涅槃に非ず。菩提を菩提と認めたら眞の菩提に非ず。極樂も天堂も亦復然り。——瀟灑絶、その様な

ものが毫末でもあらば眞の瀟灑絶に非ずして玉に瑕。絶瀟灑、その様なものが些少でもあらば眞の絶瀟灑に非ずして鏡に塵。——瀟灑絶も拂ふべし。絶瀟灑も除くべし。拂ひ拂ひ盡せ。除き除き除き盡すべし。茲に到れば、「碧眼胡僧難辨別。」辨別なしがたき所が本場、本物、本體、本領。——之是を本地風光と云ふ。——碧眼胡僧は達磨大師のこと。——最後に一句を添へておく。云く、
無一物中無盡藏、有花有月有樓臺。——

(昭和十三年五月十四日講演)

388
311

昭和十四年三月九日印刷
昭和十四年三月十六日發行

發行兼
印刷者

佐々木 四郎

東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井會社社內

發行所

東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井會社考査課

終

